

自分以外の何かになって表現することが難しい子ども

—自由遊び場面の事例から—

村瀬瑠美（神戸大学人間発達環境学研究所）

1. 背景と目的

幼児の身体表現において自分以外の何かになる身体表現（模倣・なりきり）の研究は数多くなされている。しかし、恥ずかしいから・嫌いだからといった理由で身体表現を回避するのではなく、身体表現に対して前向きな姿勢を見せながらも、自分以外の何かになることが難しい子どもに着目した研究は少ない。このような子どもは、どのような理由や背景を持つのだろうか。村瀬・寺山（2021）の行ったオノマトペに対する身体表現の実験場面では、恥ずかしいからという理由ではなく、「○○にはなれないから・できないから」と言って動き出さない子どもの姿が見出され、動き出さない理由や背景について考察が行われている。しかし、村瀬・寺山の研究は実験とその前後の場面での子どもの姿しか捉えられていないため、そこから得られた考察も限定的である。自分以外の何かになることが難しいことの原因や背景の解明は、模倣・なりきり等の身体表現を多様で豊かに導くための方策を検討する基礎理論となると考えられる。しかし、先述のとおり、自分以外の何かになることが難しい子どもに焦点を当てた研究はほぼ見られず、このような子どもの日常保育中における特徴や傾向についても解明されていない。まずは、自分以外の何かになって表現することが難しい子どもの特徴を見出すことから始めることが大切ではないだろうか。

そこで、本研究では、子ども自身が好きな遊びを決定して行うことのできる場面を自由遊びの場面として、日常保育中の自由遊びの場面での子どもの言動に着目する。自由遊びは「ひとりひとりの欲求から出発し、かれら自身のちからですすめ、ひろげられたものである（原文ママ）」（久保田，1975，p. 38）と言われるように、自由遊びの場面に見られる子どもの姿は、その子ども自身の内面をあらわしていると考えられる。よって、自分以外の何かになることができない子どもの特徴を明らかにするにあたって、自由遊び場面での子どもの姿を検討する。

以上から、本研究の目的は、自分以外の何かになる身体表現が難しい子どもの自由遊び場面での言動を事例として取り上げ、自分以外の何かになって表現することが難しい子どもの特徴を明らかにすることである。

2. 方法

本研究で扱う事例の概要は以下である。

①事例について

本研究で取り上げる事例は、いずれも日常保育における対象児の自由遊びでの言動を参与観察・映像記録したことで得られたものであった。

②対象児

筆者が以前行った身体表現に関する研究対象児の内、自分以外の何かになることが難しかった5歳児の女児1名（A児）

③日時と場所

2021年11月、Bこども園にて4日間にわたって観察された。4日間とも午前中の自由遊び時間（10時から11時半頃まで）を映像記録した。

④事例の分析

得られた映像記録から、対象者の言動や周囲の状況をテキスト化し、他の子どもの言動や先行研究で言及されている子どもの姿と比較して、A児の特徴と考えられる点を抽出し、事例検討を行った。

3. 事例

紙面の都合により、本抄録では2つの事例の概要のみ記載する。

事例①：おままと場面

同じクラスの子どもたちがおままとをしているときに、他児の写真を撮影する係として集団に参加していた。A児は写真を撮影するふりをしているものの、他児のようにおままと内で何かの役割を演じることはなかった。

事例②：動物のまねをする場面

他児たちが動物のまねをしている際に、他児たちに「○○（動物名）になって」と指示することはあったが、自らが動物になることはなかった。

4. 考察

A児は自由遊び場面において、自分自身のまま参加できる役割や立場に自分を置く、遊びの状況に合わせて役割や立場を変えることを避けるという特徴があった。村瀬・寺山（2021）は、幼児の身体表現において、＜自分＞を主体としてだけではなく、客体として捉えた上で行為することが出来なければ、自分以外の何かになることは難しいと述べている。自分以外の何かになる身体表現が難しい子どもは、＜自分＞を客体として捉えられない、もしくは捉えることが苦手であるため、何かになることを回避する可能性が考えられる。

引用参考

久保田浩（1975）あそびの誕生．誠文堂新光社．
村瀬瑠美・寺山由美（2021）幼児がオノマトペから想起するイメージと動き：イメージと動きの関係と＜自分＞概念に着目して．（公社）日本女子体育連盟学術研究，37：1-16．